岡潔は研究への一途な姿を見せた
学問への関心が自ずから感染する
人間性がそのまま講義の原風景

一歩先のあなたへ

永田和宏

9 へんな数学者

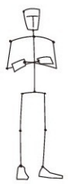
これまで少し真面目な話ばかり書き過ぎてきた気がするので、このあたりでちょっと一息入れることにしよう。

大学の教養部で数学のK教授から聞いた、孤高の天才数学者・岡潔のエピソードが強く印象に残っている。文化勲章も受けたわが国を代表する数学者のひとりであるが、奇行の多いことでも夙に有名であった。

岡潔の講義はそうとうに変わっていたらしい。演習の時間などは、黒板いっぱいに数式を書いたきり、それに向かって考えはじめ、夜になっても終わらないこともあったという。ある時は、次の講義の時間に、この前の解き方は全部嘘でしたと断固たる口ぶりで言ったとか。K教授は懐かしそうに話された。

「岡氏の身なりは、しかし、大学の先生らしくなかった。背広の腰にきたない手ぬぐいをぶらさげている所は、まるで三高の応援団員みたいであった。入学早々出された演習問題が、また恐ろしく難しかった。学生の知識の程度など全く無視したような問題であった」と、岡潔の思い出を書いているのは、湯川秀樹である（『旅人』）。

続けて「そういう難かしい問題にぶつかって行くことが、また私に一種のスリルを味わわせてくれることにもなった」とも述べている。湯川は三高の幾何学の先生が、自分の言ったままの答を書かなければ及第点をつけなかったことで数学に絶望したのであったが、岡潔の数学には逆に強く惹かれたようだ。



同じ時に岡潔の演習をうけていたのが、もう一人のノーベル賞学者朝永振一郎であった。湯川と朝永は同級生である。朝永は、岡潔の魅力を「みずから情熱を研究にささげているという点にある。その情熱が学生に伝わってくるのである」と述べ、「ときどきは御自身の研究についての話もきく。若い先生というものは、学生にわからせるというよりも、御自身の興味に溺れることもあるものだが、これがまたなまいきな学生にはたまらぬ魅力なのである」と続けている（『わが師わが友』）。

「みずから情熱を研究にささげている」ことが学生に伝わること、そして「学生にわからせるというよりも、御自身の興味に溺れること」が先生の魅力であることは、なにも岡潔に限ったことではないのであろう。

ここには教える内容、いま風に言えばコンテンツがまずあって、それを学生に伝えるための仲介者に徹するという教師像はまったくない。先生は道具でも機械でもないのである。ひたすら自身の興味を追及し、それしか目に入らないほどの研究への〈没頭〉と〈一途さ〉を見せる。その現場を学生たちに直截見せることで、学問への関心が自ずから感染していく。そんな羨ましいような、そしてわが身を顧みて恥しいような、講義の原風景がここにはある。

もちろん岡潔は理想の教師であったわけではない。真偽のほどはともかく、朝の出勤時、お地蔵さんに石を投げ、当たれば出勤するが、当たらなければさっさと家に帰ってきてしまったなどというエピソードも伝わっている。さすがにそこまでは行かずとも、我々の学生時代は、大学の講義に休講があるのは当たりまえのことであった。

岡潔が広島文理大に勤めていた頃、研究に没頭しすぎて、学生そっちのけで授業中も考え、講義が疎かになった時期があったらしい。学生からあまりに講義がでたらめだと苦情が出て、精神的な躁鬱も重なり、ついに辞職する羽目になった。現在の文部科学省なら、辞職は当然と言いそうな気もするが、でためではあっても、研究への一途な姿勢をナマの形で見せていた岡潔の、人間性がそのまま露出しているような講義を受ける機会を失ってしまった学生たちは、やはり損をしたのではないかと私には思えてならない。

不思議な模様

京都産業大教授（細胞生物学）、歌人

京都新聞社
The Kyoto Shimbun Co.,Ltd.

©京都新聞社 無断複製・転載を禁じます